人権だより

No.276(2021.1)

色眼鏡

中川 さと子

明けましておめでとうございます。今年もよろしくお願いします。

さて、みなさんはどのような年末年始を過ごしましたか？ 感染症拡大の影響で、例年のように親戚で集まったり旅行に出掛けたり、などはできなかったのではないかなと思います。私も、今年は自宅で両親と年越しでした。大みそかの日は、活動休止前最後の嵐のライブを家族で観ました。

ジャニーズと言えばやはり嵐の話題になることが多いですが、私はずっと関ジャニ∞というグループのファンで、15年近く、ずっと応援してきました。一番好きなメンバーが脱退してファンを引退しましたが、今でも大好きです(勿論、嵐も大好きです)。

その関ジャニ∞には、安田章大君というメンバーがいます。彼は数年前、髄膜腫という病気にかかり手術をしました。後遺症があり、光がチカチカすると眩暈を起こす危険があるため、現在でも常に色付きのサングラスを掛けて生活しています。

自分が病気になり手術をしたことを安田君が公表したのは、事が起こった約1年後でした。彼に近しい人たち以外が事実を知らなかった期間、常にサングラスを掛けている彼の姿に対する反応はさまざまでした。「チャラい」「アイドルらしくない」「先輩の前でも外さないのは失礼じゃないか？」とSNS上で言われていました。ファンの中にも批判している人がいました。安田君自身も、番組で共演する芸能人の方から誤解されているなと感じることがあった、とラジオで語っていました。ファンにとって衝撃的なこの事実を公表するタイミングは難しく、安田君はもどかしい思いをしただろうな、と思いました。

「サングラス＝チャラい」というイメージのように、私たちの身の周りはさまざまなイメージで溢れています。「若い人＝元気」「明るい人＝苦労知らず」などなど。けれど実際には、一見しただけでは分からない事情や困難を抱えていることもあると思います。現在、自分の病気のことを真摯な態度で発信している安田君に敬意を感じながら、自分の中にあるイメージにとらわれすぎない物事の見方ができるようになりたいと思います。

【人権委員の声】

中川先生の文章を読んで、自分の中のイメージだけで決めつけてしまうことは、決めつけられた人やその周りの人も傷つけてしまうと思いました。私も、見た目やイメージだけで決めつけず、物事をいろいろな見方で見ることができるようになりたいです。

１年４組 清水美海

自分の病気を世の中に公表することはとても怖いことだと思います。自分自身も、もし病気になり、そのことを友達や親戚の人に言うのはどんな反応をされるかとても怖いと思うので、勇気のある方だと思いました。

２年４組 髙橋実由

この人権だよりを読んで僕は、これからは人を指摘するときは相手のことをよく知ってからにしようと思いました。少しの言葉でも人を傷つけてしまうときがあるので、考えて言葉を選びたいと思います。

２年４組 山本哲平

一つの方向からの物事の見方では、自分の考えがかたよってしまうと思いました。自分はけっこうかたよった考え方をしてしまうので、かたよった考え方をせず、物事を別の考え方で考えようと思います。

４年４組 福本漣

髪型や服装などで相手を判断してしまうことがあると思います。サングラスについても、その人の事情を知らないで言ってしまったということだから、相手のことを考えて発言するようにしたいです。

５年４組 有田詩音

【保護者の声】 先月の文章を読んだ PTA 人権委員の方の感想です。

「差別」は反対ですが、「区別」は一口に反対とは言えません。お互いの違いを認めることが必要な場面もあると思うからです。ただ、近年推進されている「インクルーシブ教育」が、「合理的配慮」の正しい理解のもとに実現していけば、〇〇アートと表記しようとすること自体なくなっていくのではないかと思いました。共生社会の形成に向けて、自分も正しく子どもと関わっていきたいと感じました。

２年生保護者

自分が小さいころ「裸の大将」を毎週見ていたのを思い出しました。アートというのは、周りの人を感動させることができる作品だと小さいながらも感じさせてもらえるドラマだと思い、B 少年と共感できました。自分も誰かの心を動かすことができる人間になりたいと思いながら日々生活していきたいです。

５年生保護者

【字を識る】 わかることはかわること

今回初めて安田章大さんが手術をしたという事実を**知り**、彼が色付きのサングラスをかけている理由が**わかりました**。そして、それまでの「チャラい」「アイドルらしくない」といった安田さんに対する印象が**かわりました**。だからといって、安田さんがかわったわけではありません。かわったのは私です。安田さんがいつもサングラスをかけていることの背景を十分に知ることなく、自分の決めつけや思い込みのままで安田さんのことをわかったつもりになっていた私自身のありようがかわったのです。そのことに気付かせてくれた安田章大さん、ありがとう。私がかわれば、世界がかわるのですね。（あるファンの言葉）